昭和30年代の備忘録

僕と日本の少年時代

千葉豹一郎

みほん　無断使用、転載、二次利用を禁止します。

昭和30年代の備忘録

僕と日本の少年時代

千葉豹一郎

はじめに

本書は昨今ブームの昭和、主に30年代の姿を、当時の品々などを中心に、所蔵の写真や8ミリフィルムの動画も使ってなるべく正確に伝えようとするものである。

戦後の混乱も収まった昭和39年の東京オリンピックまでのほぼ10年は、新たな物も次々登場し、高度経済成長の波に乗って明日に夢と希望を託すことができた。現在からはバラ色にも見え、それが映画やテレビなどでもてはやされるゆえんだが、時代考証の間違いや微妙なズレが目立つ。何より、当時の雰囲気が描き切れていないことがもどかしく、美化し過ぎているのも気にかかる。ちょっと、違うんじゃない？と思うこともしばしばで、当時の日本が誤って伝えられることへの危惧も、本著の執筆動機のひとつだった。

そこで本著では、ちょうどこの時代に東京の片隅で生まれ育った〝僕〟の感じたままの空気を再現することに、むしろ重きを置いた。現在では忘れられ語られることも無くなったような事柄や、負の部分にもあえて触れ、多角的な視点を心がけた。

その点で、「昔は良かった」式の他の類書とは一線を画す。振り返ってみればとんでもない時代だったと半ばあきれる反面、何が飛び出すかわからない玉手箱のような興奮があり、便利さとのどかさがほど良く共存してはいた。急速な機器の発達に人の方が追い付いていけなくなっているようにも感じられる現在と比べ、この頃が一番日本の身の丈に合っていたのではないかと思う。

折しも執筆中に起こった大震災に接し、その思いを強くした。それゆえ、この時代を生きた人々が心地良さを覚え、まだ生まれてもいなかった若い世代までをも惹き付けるのだろう。当時を懐かしみ、あるいはかつてこんな時代があったことを知って楽しんでいただければ幸いである。

最後に、快くご協力下さった三越伊勢丹ホールディングス、ＵＢＣの鵜沼敏彦氏、斉田育秀氏、同窓の友人や知人、特に企画から編集までを真摯にご担当いただいたミリアムワード代表の潮田利恵さんに厚く御礼申し上げる次第である。

平成23年12月

千葉　豹一郎

みほん　無断使用、転載、二次利用を禁止します。

目　次

テレビ・芸能

テレビの青春時代…004
教科書だったアメリカのドラマ…007
プロレスと力道山…012
実写版「鉄腕アトム」と「鉄人28号」…015
コマソンの女王 楠トシエ…019

家電

電気釜の憂うつ…021
カラーテレビ狂想曲…023
リモコンテレビが欲しい！…026
クーラーをつけたまま寝ると死ぬ!?…029
ポラロイドカメラ…033
可愛いフジペットカメラ…034
８ミリフィルム…036

食

モナカカレーと「少年ジェット」…037
アメリカンドッグ事始め＋レモネード…039
ハンバーガー開拓史…042
スパゲティは炒める物？…044
謎のフトルミン…047
駄菓子屋とお菓子屋のあったころ…049
粉末ジュース盛衰記…054
傑作！ 噴水型ジュース自販機…057
10円アイスクリームが花盛り…059
消えたガムつれづれ…061

ホビー

鉄の手裏剣…064
２Ｂ弾とクラッカー…067
銀玉鉄砲の王道…069
輝くマテル…072
黒かった金属製のモデルガン…074
プラモデル熱中時代…077

社会・文化

ケネディの時代…080
外車変遷記…083
国産車は酷惨車？…087
サンドイッチのような車の三角窓…090
デパートはワンダーランド！…091
町の映画館…099
折りたたみ式コップ…102
月刊マンガ誌と付録…104
ペラペラのソノシート…107

みほん　無断使用、転載、二次利用を禁止します。

テレビの青春時代

Vernal years of TV

名作ミュージカル『雨に唄えば』（1952）を観てから雨の中を歩くのが前より憂うつではなくなったが、そのストーリーは映画がサイレントからトーキーに変わる際の大混乱を描いたものだった。日本のテレビも初期には混乱や珍事続きで、それはそれは面白いものであった。

昭和28年（1953）にNHK1局でスタートしたテレビ放送は、8月には日本テレビ、昭和30年（1955）にはKRT（現TBS）が開局。新聞の番組表もまだラジオの方がメインだった。昭和33年（1958）には電波塔である東京タワーが完成し、翌年2月にNET（現テレビ朝日）、3月にフジテレビが開局して、4月には皇太子の御成婚で一気にテレビが普及する。

しかし、〝電気紙芝居〟という嘲笑や、評論家の大宅壮一による「一億総白痴化」論のように、早くもテレビの悪影響を警戒する声も強く、テレビの現場にはいい物を作ってこれらを見返してやろうとする熱い息吹が感じられた。

「週刊テレビ時代」創刊号（昭和35年4月3日発行、旺文社、定価50円）

2008年に映画リメイクされた『私は貝になりたい』や、『マンモスタワー』といった力作が立て続けに生まれ、生放送のためほとんどの映像が現存しない当時の番組の中にあって、これらは奇跡的にビデオテープが残されている。特に『マンモスタワー』は、斜陽に向かう映画界と日の出の勢いのテレビ界を対比させ、来るべき時代を予感させる力作だった。

新たに勃興したテレビは古い因習に縛られる映画界とは異なり、自由な雰囲気と活気に満ちていたようだ。このころにNHKの現場にいた僕の母親の話からも、それはうかがえる。労働組合も強く管理のしっかりしたNHKのことゆえ、民放のように徹夜の突貫作業などはなかったようだが、それでも深夜までみんなが立ち働いた。多忙な局員が

サイレントからトーキー

無声映画（サイレント）から発声映画（トーキー）へ。無声映画時代は、字幕でセリフやト書きを表示したり、活動弁士と呼ばれる専門の映画解説員が内容をしゃべりながら上映するスタイルがとられていた。初のトーキー（部分）映画は1927年公開の『ジャズ・シンガー』（米／ワーナーブラザーズ）。

「一億総白痴化」論

1957年、ノンフィクション作家で社会評論家の大宅壮一が生んだ、テレビ放送黎明期の流行語。テレビメディアが提供する低俗な番組をただ眺めるだけの行為は、国民の想像力や思考力を低下させるという指摘。

みほん　無断使用、転載、二次利用を禁止します。